丹後・北丹波地域における古墳時代滑石製模造品出土集落遺跡の一様相
－桑飼上遺跡、女布遺跡－

岸岡　貴英

1．はじめに

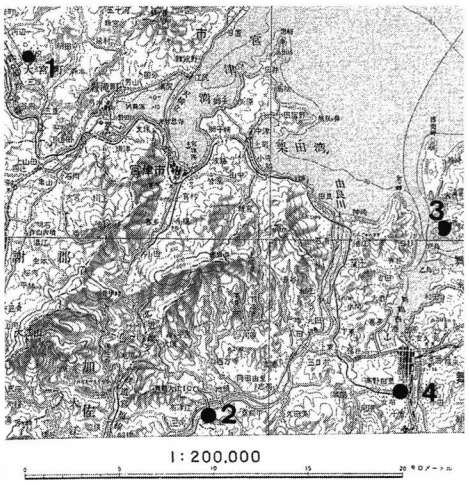
滑石製模造品は、古墳時代の祭祀遺跡や古墳の副葬品等に見られ、日常生活品の形を模倣してつくられた非実用的な仮器いわゆる祭祀具と一般的に考えられている。その種類には、武器、武具、服飾品、農工具、子持勾玉など多種多様な形態ものが見られる。(注1)

丹後・北丹波地域の古墳時代滑石製模造品が出土する古墳及び集落遺跡は、管見によるかぎり、丹後地域で12例、北丹波地域で27例ある。その種類には、有孔円板、勾玉、管玉、臼玉、棗玉、刀子・剣形品、紡錘車、琴柱形石製品がみられ、その出土量の大半は臼玉や棗玉などの玉類、有孔円板、紡錘車である。(注2)

この地域における滑石製模造品を出土する古墳や集落遺跡は、他の地域にくらべて多い方ではなく、またその種類も限られている。古墳に限って言えば、農工具が出土していない点も他の地域と比べると目立つ。その中で集落遺跡について言えば、近年、資料が少ないながらもその特色が明らかになってきている。

2．集落遺跡の概要

この地域を代表する祭祀遺跡として評価されてきた遺跡に、多量のミニチュア土器や滑石製模造品が出土した京丹後市大宮売神社遺跡がある。安藤信策氏は、この遺跡について、「丹後の祭祀遺跡、古社の境内及び関係地」としてその内容を述べているが、具体的な祭祀の対象やその実態には及んでいない。(注3)所有者及び保管機関の協力を得て、遺物を観察させていただいたところ、比較的良質な滑石石材からなる臼玉(59点以上)、



第１図　主要遺跡位置図
1．京丹後市大宮売神社遺跡　2．舞鶴市桑飼上遺跡　3．舞鶴市千歳下遺跡　4．舞鶴市女布遺跡

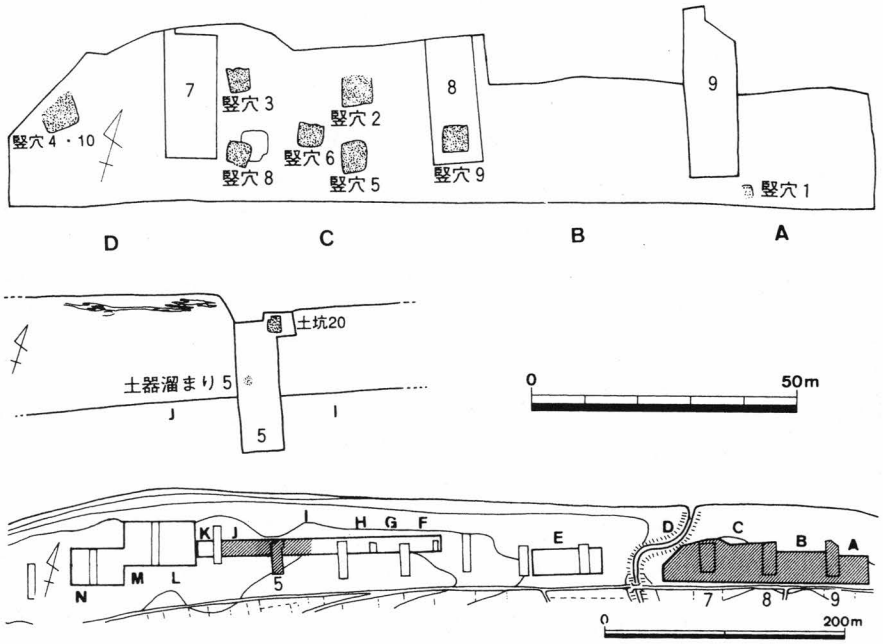
剣形品（１点）、有孔円板（6点以上）、紡錘車（１点）、勾玉（10点以上）がみられ、良質な石材からなる祭祀品が供給され使用された遺跡として評価できる。(注4)

また、銅鏡、鉄製品、土器類とともに多量の滑石製模造品が出土した舞鶴市千歳下遺跡も注目される。この遺跡は舞鶴湾口東岸の幅70m・奥行き150mと狭小な谷部に位置する。出土した滑石製模造品には有孔円板７点以上、臼玉約700点、ほかに勾玉、管玉があり、量的にはこの地域でもっとも多い。舞鶴湾口をおさえていた海辺の集団が海上交通の安全を祈った祭祀場所として報告されているが、現在整理中であり、評価が定まるには時間がかかると思われる。(注5)

ほかに、比較的多く滑石製模造品が出土した集落遺跡に舞鶴市桑飼上遺跡と舞鶴市女布遺跡がある。桑飼上遺跡は、由良川下流域の自然堤防上に位置する遺跡であり、昭和62年度～平成２年度、平成５年度に計15000㎡以上の調査が行われ、古墳時代中期の居住域が確認されている。中でも昭和63年度調査区には、古墳時代中期後半の８棟の竪穴式住居跡が検出され、その内外から多量の滑石製模造品[臼玉（175点）、勾玉（２点）、管玉（２点）、有孔円板（２点）]が出土した。これらの多くは、竪穴式住居内から出土しており、床面の１か所に集中的に出土する状況やその全面から散在して出土する状況が見られる。後者については、一定検討を行い、竪穴式住居跡の覆土中に多量の臼玉が含まれている点について、流入土自体に多量の臼玉が含まれていたと想定されるとして、二次的なものと指摘した。(注6)

女布遺跡は、舞鶴湾に注ぐ高野川及び伊佐津川が合流する平野部に位置する。この遺跡は表採された子持勾玉の存在から、よく知られていたが、平成元年、平成9年、平成13年度に計1500㎡以上が調査され、その内容が明らかとなった。特に第３次調査では古墳時代中期～後期の竪穴式住居跡が３棟検出され、この時期の居住域の存在が確認された。さらに、その包含層1500㎡を対象に65地点からサンプル的に採取し、土壌を洗浄したところ、臼玉（29点）、勾玉（１点）、滑石製未製品が出土した。(注7)

北丹波地域における滑石製模造品を出土する集落遺跡は、管見によれば11例あるが、現状では、滑石模造製品が数点確認されている桑飼下遺跡等と10点以上出土している舞鶴市桑飼上遺跡や女布遺跡などにわけることができる。これまで、出土例が少ないことから、この地域の滑石製模造品の評価についてはほとんど明らかになっていない。今回は、桑飼上遺跡や女布遺跡の検討を行うことにより、この地域の集落遺跡の一様相を明らかにしたい。



第2図　桑飼上遺跡古墳時代中期検出遺構図

3．問題の所在

石製模造品が出土する住居跡や集落跡については、これまでさまざまな視点から検討されてきた。例えば、高橋一夫氏は集落内における石製模造品が出土する住居跡を「家父長制的世帯共同体の家父長の住居ではないか」と問題提起している。(注8) また、小室臼井先遺跡を分析した椙山林継氏は、石製模造品を豊富に出土する集落と出土しない集落について、「祭祀方法の相違」と考えた。(注9) 同じく、後藤泉氏は群馬県の古墳時代中期～後期の集落遺跡を分析し、石製模造品を保有する集落について、「在地の首長層がその影響下にある一般集落に支配関係の確認のため石製模造品を供給し、これを用いた祭祀方法を採用させることで祭祀面における支配強化をねらった」と解釈した。(注10)

古墳時代の豪族居館が検出された群馬県群馬町三ツ寺遺跡においても、居館の内部施設や外辺を区画する遺構の多くから250点になる滑石製模造品が出土している。滑石製模造品は、「供献、埋納、投棄」の性格を異にする3つの出土状態を持ち、「玉類、鏡・円板、剣形、農工具」に4大別される。製作の特徴は、勾玉、臼玉、剣形の多くが簡略な表現で規格製作され、子持勾玉、刀子、鏡、斧の少数出土器種が青灰色の良質な原石を用いて大型でていねいな作り方をしている。居館の遺構の時期は大きく3期にわかれ、祭祀遺物の出土の変遷は、居館での祭祀が粗製、量産化へと向かう過程を示している。(注11)

篠原祐一氏は石製模造品が出土する地域と出土しない地域が存在することと、関東の石製模造品製作地が地域限定する傾向などから、その生産や配布には大きな規制が働くと考

えた。その上で、滑石製模造品の粗製化から、滑石製品の工房跡のような集団化された生産地の消滅から粘板岩製品などのような消費地の現地生産を想定した。さらに、それらの普及の拡大を、本来的な祭祀の意味や支配者層の支配層への祭祀規制権利を有名無実化するものとし、５世紀後半の石製模造品が集落で消費される状況をそれと捉えている。(注12)

大阪府八尾市・東大阪市池島・福万寺遺跡は、平成元年から平成6年度まで約85000㎡の調査がおこなわれた。５世紀後葉～６世紀前葉の古墳時代の集落跡が検出され、滑石製模造品として子持勾玉２点、剣形模造品２点、有孔円板１点、不定形有孔石製品129点、管玉4点、切子玉１点、臼玉関連資料3264点が出土している。

この遺跡の滑石製模造品を検討した広瀬時習氏は、これまでの検出された玉作工房跡の資料と比較検討を行った。その結果、玉作工房跡として認められている滋賀県守山市吉見西遺跡や群馬県藤岡市本郷山根遺跡等で出土した滑石資料の大部分が剝片・チップであり、池島・福万寺遺跡を滑石製玉作遺跡としてみた場合、玉作の原材料や初期段階の製作関連資料の欠落しており、滑石製玉類生産という形の生産形態において、これまで知られているような玉作工房跡としての面を否定した。加えて、篠原氏が指摘した集団的な生産体制が終焉を迎えた後の消費地における現地生産もしくは使用時の即生産の姿として、池島・福万寺遺跡の集落を捉えている。(注13)

また、中・四国における滑石製模造品の生産を検討した米田克彦氏は、広島県浄福寺遺跡、胡麻２号遺跡、愛媛県出作遺跡等から、集落遺跡現地で滑石製品を生産し消費している状況を考えている。(注14) さらに、南近江における滑石製玉生産を検討した大岡由記子氏は自給自足の在地的な生産、消費のサイクルを想定している。(注15)

このように、従来玉作生産を考えていなかった遺跡においも、原石やチップが出土しない中で未製品がみられる場合、消費地における現地生産の姿を想定できるようになってきたのが現状である。ここで、桑飼上遺跡や女布遺跡の遺物について観察し、その生産の可能性について検討していきたい。

４．滑石製模造品の検討と観察

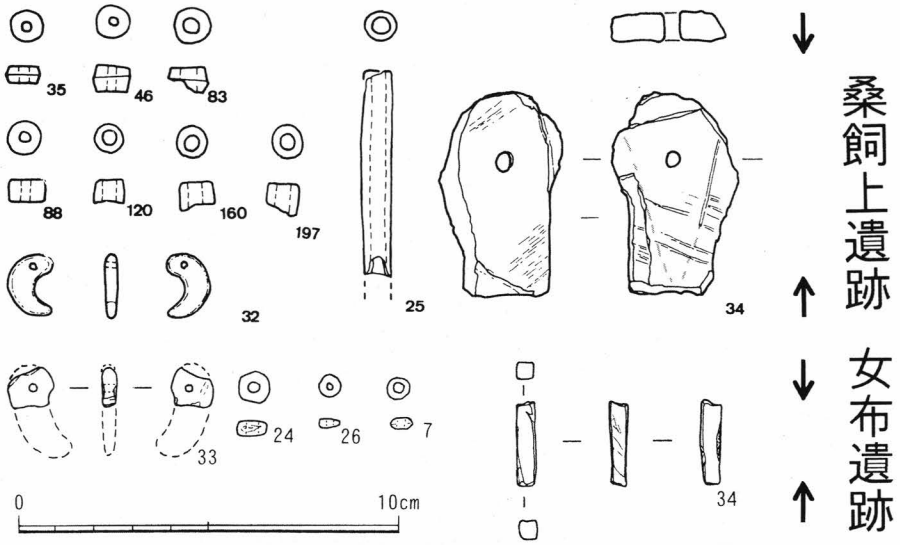
（１）桑飼上遺跡　桑飼上遺跡の臼玉については、辻川哲郎氏が整理している。辻川氏はその調整手法と形態から、側面に稜を有する一群（１類）と稜を持たない一群（２類）、臼玉の上下両端面がほぼ平行な一群（Ａ類）と上下両端面が非平行な一群（Ｂ類）、側面の縦方向の研磨痕を磨り消した一群（ａ類）と縦方向の研磨痕を残す一群（ｂ類）とに分類した。臼玉については総数184点出土しているが、これらの比率をみると１Ａａが3.8%、２Ｂｂが27.2%となる。つまり、側面に稜を有し両端面、側面ともていねいに仕上げた一群が全体

の3.8%と少量で、側面に稜を持たない端面、側面とも粗く仕上げた一群が27.2%ともっとも多量となり、粗製ものが多くを占める。全体的な遺構の各比率もそれほど偏る状況ではない。ただ、床面に接して５～10cm内外のところから集中して出土した竪穴式住居跡１の一群だけは、２Ａb(22%)と２Ｂb(78%)のみからなる。辻川氏はＢ類を管玉状の石材を輪切りにした可能性を指摘しているが、この２Ｂb類の18点は、ほぼ同一の内径、外径を有している。この形態及び調整の類似は、同様の製作手法による可能性が高い。

今回改めて、石材の特徴を観察したが、桑飼上遺跡の滑石製模造品の石材は濃青色～濃緑色を呈し、光沢があり、透明度の高いものが多い。これら以外にも淡緑灰色を呈し、光沢があり、透明度が高いもの、灰白色～薄い茶色を呈し、光沢はあるが透明度の低いものなどみられる。ただ竪穴式住居跡１の一群は濃青色で透明度の高い一群に限られ、他の遺構の状況とは相違する。このような形態、調整手法、石材が類似していることを考えると、これらの臼玉の一群は製作時のセットの状況をそのまま反映している可能性が高い。

さらに、報告書では緑色凝灰岩製の不明石製品として報告した１孔を穿った扁平な板材について再度石材を観察した。その特徴は緑灰色を呈し半透明を呈するものであり、類似する特徴から、滑石と考えられる。また、調整手法の面からも側面調整は行われていないが、平面に製作途中の痕跡と考えられる直線状の線刻が２本みられ、剣形品もしくは玉類の未製品段階のものと考えられる。

この遺跡からは、原石や大型の剝片、さらに微細な剝片、チップなどは出土しておらず、一見したところ、滑石製の玉類等を生産していた痕跡は認められない。ただ、出土した遺物を観察した結果、わずかながらも、製作時のセットの状況を示す臼玉の一群や滑石製模



第３図　桑飼上遺跡及び女布遺跡出土滑石製模造品及び未製品(番号は報告書記載番号と同一)

付表１　　臼玉分類表

臼玉分類	分類		整形
1Aa	側面に稜を有する	上下両端面がほぼ平行	縦方向の研磨痕をすり消す
1Ab			縦方向の研磨痕を残す
1Bb		上下両端面が非平行	
2Aa	側面に稜を持たない	上下両端面がほぼ平行	縦方向の研磨痕をすり消す
2Ab			縦方向の研磨痕を残す
2Ba		上下両端面が非平行	縦方向の研磨痕をすり消す
2Bb			縦方向の研磨痕を残す

付表３竪穴５出土臼玉分類比率表

臼玉分類	埋土洗浄	埋土	床面	比率
1Aa	5			4.8%
1Ab	14	2	1	16.3%
1Bb	7	1	2	9.6%
2Aa	12	2	1	14.4%
2Ab	26	2		26.9%
2Ba	4	1		4.8%
2Bb	19	4	1	23.1%
計	87	12	5	

付表２　出土臼玉分類比率表

臼玉分類	竪穴式住居跡番号									トレンチ番号				計(点)	全体	竪穴１
	1	2	3	4	5	6	8	9	10	J	A～D	M	N			
1Aa			1		5					1				7	3.8%	
1Ab		1			17	3	4							25	13.6%	
1Bb					10	2	2				2	2		18	9.8%	
2Aa			4	1	15	1	3			1	1			26	14.1%	
2Ab	5			1	28	4	1		1		3			43	23.4%	22%
2Ba			7		5	1	2							15	8.2%	0%
2Bb	18				24	5					1		2	50	27.2%	78%
計	23	1	12	2	104	16	12	0	1	2	7	2	2	184		

(注)付表は報告書の一覧表をもとに作成した。なお、竪穴２からは蛇紋岩製もしくは滑石製管玉１、竪穴４からは滑石製有孔円板２、ガラス製小玉１、竪穴５からは滑石製勾玉１、碧玉製勾玉１、竪穴９からは蛇紋岩製もしくは滑石製管玉１、A～Dトレンチ包含層からは蛇紋岩製もしは滑石製管玉１が出土している。

造品の未製品が存在することが判明した。これは、篠原氏が指摘し、広瀬氏が池島・福万寺遺跡の例で示したように、消費地における現地生産もしくは使用時の即時生産の状況として解釈できるのではなかろうか。

(２)**女布遺跡**　滑石製臼玉(29点)、滑石製勾玉、滑石製方形柱状の未製品等について資料を観察できる機会を得た[注16]。臼玉の石材は緑灰色で光沢があるが透明度が低いもの、濃青緑色で光沢があり透明度があるもの、茶色で光沢や透明度があり、黒色の鉱物が確認できるもの等がある。

滑石製勾玉は、扁平な板状のものに１孔穿ったもので、側面は一部刀子状のもので成形した痕跡がみられるが、他の面はほとんど調整されていない。報告のように上下両端が欠損したとしても、側面はまだ未調整段階のものと考えられる。方形柱状の未製品は、光沢はあるが透明度は低く、灰白色を呈し、黒色の鉱物が混じる。片岩系の石材である可能性がある。この調査では滑石の原石や大型の剝片、さらに微細な剝片、チップなどは出土していないが、その製作に使用する石鋸や滑石製方形柱状の未製品が確認されており、集落内で製品に仕上げる工程が行われていたと考えられる。

５．まとめ

以上のような桑飼上遺跡や女布遺跡の状況は、篠原氏が指摘し広瀬氏等が具体的実例を

あげた消費地における滑石製模造品の生産の例として、解釈できるのではないかと考えられる。ただ、これらの遺跡においてどのように使用されたのかが明らかとなっていない。

桑飼上遺跡のような専業の玉作工房跡ではない竪穴式住居跡から多量の滑石製模造品が出土した例は、いくらか確認されている。たとえば、埼玉県川越市御伊勢原遺跡は古墳時代中期中葉～後半の43棟の竪穴式住居跡、祭祀跡等から2700点以上になる滑石製模造品が出土している。器種は、勾玉、有孔円板、剣形品、紡錘車、管玉、臼玉等がある。臼玉等が多量に集中して検出された区域は第１祭祀跡と呼ばれる丘陵頂部と多数の竪穴式住居跡が検出された区域である。多量の臼玉等はほとんど竪穴式住居跡に伴うものでなく、祭祀等が想定できるものではないとされている。祭祀跡は、約300㎡の範囲に広がり、多量の土器や貝殻、鉄片が伴う状況である。その出土状況から祭祀遺物の捨て場的な性格を持っていたと想定されている。(注17)

集落内から多量に滑石製模造品が出土する遺構には、竪穴式住居跡に加え、土器溜りがある。京都府大山崎町下植野南遺跡調査Ｂ地区では、古墳時代後期の竪穴式住居跡や土器集積遺構などから滑石製の臼玉約500点が出土している。土器集積遺構は、多種類の完形の須恵器や土師器を浅く掘り凹めた土坑に据え置かれたもので、周辺に臼玉が散在した状態で検出された。(注18) このような臼玉が多量の完形の土器とともに検出される祭祀遺構は「集落共同の祭祀場」、「田畑のまつり」として性格づける意見もある　。

桑飼上遺跡においては、このような多種・多量の完形土器と多量の臼玉がセットで出土するような状況ではなく、あくまでも住居内埋土からの出土であり、二次的な流入の範囲を出るものではない。ただ、その出土区域については、竪穴式住居跡５付近に集中する状況であり、規模の違いはあるが、居住域の竪穴式住居跡から多量に出土する御伊勢原遺跡と類似するため、隣接地に祭祀場が存在した可能性も考えられる。

今後は、日本海沿岸地域全体に視野を広げて滑石製模造品の生産、流通、消費状況を見ていく必要がある。

（きしおか・たかひで＝京都府教育庁指導部文化財保護課主任）

注１　分類およびその用語については以下の論考を参考にした。
赤崎敏男「九州の石製模造品」（『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』（下）　森貞次郎博士古稀記念古文化論文集刊行会）1982
白石太一郎「神まつりと古墳の祭祀―古墳出土の石製模造品―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集　国立歴史民俗博物館）1985

注２　第54回埋蔵文化財研究集会「古墳時代の滑石製品」発表要旨集による。なお、福知山市教委永谷氏により、向野西古墳群から大型の滑石製臼玉が出土していることを御教示頂いた。

注３　安藤信策「Ⅱ郷土資料調査報告－丹後の祭祀遺跡－」(『丹後郷土資料館報』第６号　丹後郷土資料館)1985　大宮売神社出土の滑石製模造品は、光沢があり透明度の高い濃青色を呈するものと光沢と透明度があり、緑灰色に茶色の色調がシミのように入る石材が多数を占める、石材の種類も２～３種類に限られる。京都国立博物館の宮川氏、大宮売神社代表役員島谷和宏氏のご好意により資料を実見させて頂いた

注４　いわゆる滑石製模造品の石材には、滑石以外にも蛇紋岩等が使われていることが指摘されている。丹後、丹波地域のいわゆる滑石製模造品の一部を観察したところ、確かに、滑石の特徴でない光沢のない、透明度の低いものもみられた。一例をあげると福知山市八ケ谷古墳出土の琴柱形石製品の一部、福垣北２・３号墳周辺第１埋葬施設出土の勾玉と臼玉の一部である。資料については、京丹後氏教育委員会橋本勝行氏、福知山市教育委員会八瀬正雄氏、永谷隆夫氏、綾部市教育委員会近澤豊明氏、三好博氏により資料を実見する機会を賜った。なお、三好博喜氏及び丹後郷土資料館細川康晴氏には資料収集にあったては多大なご協力を頂いた。

注５　松本達也「海浜部の祭祀遺跡(千歳下遺跡)」(『第７回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集』京都府埋蔵文化財研究会)1999

注６　細川康晴ほか「桑飼上遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第19冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注７　松本達也「京都府舞鶴市女布遺跡第３次発掘調査概要報告書」(『舞鶴市文化財調査報告』第37集　舞鶴市教育委員会) 2002

注８　高橋一夫「石製模造品出土の住居跡とその性格」(『考古学研究第18巻３号』　考古学研究会) 1981

注９　椙山林継「住居址発見祭祀遺物の研究－時期検討を中心に－」(『国学院大学日本文化研究所紀要』第35輯　国学院大学日本文化研究所) 1975

注10　後藤泉「５～６世紀における集落祭祀の一様相」(『古代文化』第45巻８号　財団法人古代學協会) 1989

注11　下城正ほか「三ツ寺Ⅰ遺跡」(『上越新幹線関係埋葬文化財発掘調査報告書』第８集　群馬県教育委員会) 1988

注12　篠原祐一「臼玉研究試論」(『研究紀要』第３号　(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター) 1995

注13　井上智博ほか「池島・福万寺遺跡２」(『(財)大阪府文化財センター調査報告書第79集』　(財)大阪府文化財センター) 2002

注14　米田克彦「中・四国における滑石製模造品の生産」(『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』　古代吉備研究会) 2002

注15　大岡由紀子「南近江における滑石製玉生産」(『古代学研究』154号　古代学研究会) 2001

注16　舞鶴市教育委員会松本達也氏の協力により、資料を実見させて頂いた。

注17　立石盛詞ほか「御伊勢原遺跡－住宅・都市整備公団霞ヶ関土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ」(『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第79集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団) 1989

注18　中川和哉ほか「下植野南遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第25冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注19　注11及び17に同じ。